様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６６８
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３４６７

研究課題名（和文）ろう者学の知見を反映したソーシャルワーク教育に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical research on social work education reflecting the insights of Deaf Studies

研究代表者
高山　亨太（Takayama, Kota）

日本社会事業大学・付置研究所・研究員

研究者番号：００８６９９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ろう・難聴者に関わるソーシャルワーカーがろう者学の知見を取り入れた上で、ソーシャルワーク実践を実することの重要性を明らかにした。具体的には、ろう文化ソーシャルワークを実践するためには、ソーシャルワーカー自身が無意識的に捉えているろうの意味を解体した上で、再認識することが必須条件であることを示した。その上で、オーディズム、ろう文化論、デフゲイン、ろうコミュニティ文化的資産といった各種理論を理解することが重要である。介入研修の結果、ろう者学の視点を理解するためには、事例検討が役立つこと、また手話のみでの進行が結果的にろう・難聴当事者ソーシャルワーカーにとっては重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国連障害者権利条約において、「障害者は文化的同一性の承認と支持を受ける権利を有する」とされているが、文化言語的少数者であるろう者がソーシャルワークを通して最大限の恩恵を受けられていないのが実情であった。我が国のソーシャルワークにはそのことはまだ十分に反映されておらず、医伝統的なソーシャルワーク実践では、ろう者が不利益を被るどころが、さらなる抑圧構造の中にろう者を引き込むことになることを示したことが本研究の社会的意義の一つとして考えられる。医学モデルに支配されたろう者に関する諸言説やスティグマに抵抗するための知識や経験の集合体化がろう者学であり、その養成カリキュラムの実証を実施した意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study highlights the importance for social workers working with deaf and hard of hearing clients to integrate knowledge from Deaf Studies into their social work practice. Specifically, it demonstrates that for effective Deaf culture social work, it is essential for social workers to deconstruct and reassess their unconscious perceptions of deafness. Additionally, understanding theories such as Audism, Deaf culture theory, Deaf Gain, and the deaf community cultural wealth is crucial.
The study found that intervention training for social workers, conducted in sign language, is particularly beneficial for deaf and hard of hearing social workers and that case studies are helpful in understanding the perspective of Deaf Studies.

研究分野：障害学・ろう者学

キーワード：ろう者学　ソーシャルワーク教育　ろう文化　カリキュラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

聴覚障害者、とりわけ手話を第一言語とするろう者は音声言語が中心のマジョリティ社会において、教育や就労の機会の確保や継続などの社会生活上の困難を抱えている。ろう者を聴力損失の観点から障害者として捉える伝統的な医学的モデルに対して、手話を使い、ろう文化を持つマイノリティとして捉える文化言語モデルがある（Lane 1992）。文化言語的マイノリティであるろう者は、教育や福祉サービスに関して、特有で、かつ複雑なニーズを抱えている（Harris.and Bamford 2001）。そのため、従来の医学的モデルによるソーシャルワークでは対応が不十分であり(Young ら 2004)、ろう文化の特性に即したソーシャルワークの実践が重要である（Sheridan & White 2008）。ろう者が障害者としてではなく、文化言語マイノリティとして、医学モデルに立脚した様々な言説やスティグマに抵抗するための経験知やろう文化と定義される文化継承の重要性を主張してきた知識集合体がろう者学（Deaf Studies）という学問体系として認識されている。ろう者学の主な理論枠組みは、社会学や文化人類学、歴史学、哲学を始めとした基礎知識と、文化論及び批判理論の視点を土台としており、ソーシャワークやろう教育といった他領域に応用が可能である。ろう者学の主な理論は、①ろう文化論、②オーディズム、③感覚指向論、④デフゲイン、⑤ろう理論、⑥デフフッド、である。特に、近年のソーシャルワークがエンパワーメントやストレングス視点、反抑圧主義、アドボカシーなどを取り入れようとする潮流がある中で、批判理論やろうコミュニティが受け継いできた文化資本や文化言語モデルなど、ろう者学の理論動向はソーシャルワークが指向する方向性と一致している.

医学モデルに基づく伝統的なソーシャルワーク実践では、ろう者が不利益を被るどころが、さらなる抑圧構造の中にろう者を引き込むことになる。医学モデルがろう者を聴者コミュニティに適応させようとする実践や視点から脱却できないことが、ろう者にとって最大の障壁なのであり、それこそが文化言語モデルが必要な根拠なのである。医学モデルに支配されたろう者に関する諸言説やスティグマに抵抗するための知識や経験の集合体化がろう者学であり、ろう者学を取り入れたソーシャルワーク実践がろうコミュニティにおいては重要なのである。このソーシャルワーク実践を「ろう文化ソーシャルワーク」と定義づけ、その適切な理解、応用のためには、ろう者学の視点を取り入れたソーシャルワーク教育が不可欠である（高山 2019）。

２．研究の目的

本研究では、博士論文において提示したろう文化ソーシャルワークに関する教育カリキュラム（試案）の効果や凡用性、課題について、介入実証研究を通して明らかにすることである。具体的な目的は次の通りである。

（１）先行研究を通して、日本ろう者学の基盤やその課題について整理する。

（２）欧米における先駆的カリキュラムをレビューした上で、ろうあ者相談員やろう当事者ソーシャルワーカーを始め、ソーシャルワーカーを目指す学生を対象にした教育カリキュラムを開発する。

（３）ろう者学の知見を取り入れた研修プログラムの効果や意義について、フォーカスグループインタビューなどによって検証する。

３．研究の方法

目的１：先行研究によって、日本ろう者学の基盤および今後の課題について明らかにする。

目的２：ろう・難聴者へのソーシャルワーク実践を行っているソーシャルワーカーを対象としたろう者学を取り入れた研修カリキュラムを開発する。
目的３：フォーカスグループインタビューを通して、ろう者学を取り入れた研修プログラムについて検証する。

４．研究成果
目的１：先行研究の結果、ろう者学に関する複数の理論背景によって構築され、経験が豊富な欧米のろう者学教育と比較して、日本ろう者学は、その独自の理論構築や基盤醸成が課題であることが明らかになった。具体的には、「ろう文化宣言」以降の具体的なカリキュラム開発の取り組み、日本障害学との連携といった部分で課題があることが明らかになった。今後、日本ろう者学が発展するためには、日本障害学会との連携やろう者学に関するトレーニングの機会拡大が重要である。また、多くのろう者学に関する資料が英語で書かれているため、日本語でアクセスできないという問題があった。そのため、日本語及び日本手話に翻訳し、その成果物をウェブサイトで公開した。

目的２：ろう・難聴者へのソーシャルワーク実践を行っているソーシャルワーカーや心理専門職を対象とした研修プログラムについて、ろう者学を専門とする研究者と共同で、全 4 日間の研修プログラムを開発した。研修プログラムに参加するソーシャルワーカーを募集し、8 名のろう・難聴当事者ソーシャルワーカーや手話ができるソーシャルワーカーらの応募があった。研修は、手話通訳なしで、手話による進行で進められた。研修プログラムを実施した結果、一定の効果があることが証明された。今後の課題は、（１）ろう・難聴当事者、（２）手話を知らないソーシャルワーカー、（３）手話通訳者・要約筆記者、を対象とした研修カリキュラムの開発が挙げられた。

目的３：ろう者学の知見を取り入れた研修プログラムの効果や意義について、8 名の参加者によるフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューの結果、ろう文化ソーシャルワークを実践するためには、ソーシャルワーカー自身が無意識的に捉えているろうの意味を解体した上で、再認識することが必須条件であることが前提条件であることが示唆された。その作業が最も困難で、時間をかけて取り組み必要があるとのフィードバックがあった。その上で、オーディズム、ろう文化論、デフゲイン、ろうコミュニティ文化的資産といった各種理論を理解することが重要で、それらは、ろう者個々人だけではなく、彼らを取り巻く社会環境の分析に大いに役立つことが明らかになった。研修プログラムの進行方法について、（１）事例検討がろう者学の視点の理解に役立つこと、（２）手話のみでの進行が結果的にろう・難聴当事者ソーシャルワーカーにとっては参加しやすい、とのフィードバックがあった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Craig, L., Cooper, A., Takayama, K., and Klein, H.	４．巻 18
２．論文標題 Deaf Community and DiDRR: Supporting a Twin-Track Approach	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Review of Disability Studies	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Takayama, K. and Crowe, T.	４．巻 56(1)
２．論文標題 Deaf and Hard of Hearing Asian Consumers of the Maryland Behavioral Health Service System	５．発行年 2024年
３．雑誌名 JADARA	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Takayama Kota, Craig Leyla, Cooper Audrey, Stokar Hayley	４．巻 83
２．論文標題 Exploring deaf students’ disaster awareness and preparedness in U.S. higher education settings: Implications for university-level DRR policy and programming	５．発行年 2022年
３．雑誌名 International Journal of Disaster Risk Reduction	６．最初と最後の頁 103409～103409
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ijdrr.2022.103409	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 高山亨太	４．巻 20
２．論文標題 日本ろう者学と日本障害学の交差	５．発行年 2024年
３．雑誌名 障害学研究	６．最初と最後の頁 126-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高山亨太・皆川愛	４．巻 1
２．論文標題 ろう・難聴者における新型コロナウィルスに関する健康情報の入手経路	５．発行年 2024年
３．雑誌名 リベラルアーツ＆マイノリティ	６．最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Leyla Craig, Dr. Audrey Cooper, Dr. Kota Takayama & Herbert Klein
２．発表標題 Deaf Community and DiDRR: Supporting a Twin-Track Approach
３．学会等名 Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 MInakawa, A, Takayama, K., & Yamaki, C.	４．発行年 2025年
２．出版社 Gallaudet University Press	５．総ページ数 22
３．書名 Promoting Health Literacy to Address Health Inequity in Japanese Deaf Communities	

〔産業財産権〕

〔その他〕

オーディズム https://sites.google.com/view/rounabi/audism 言語剥奪症候群 https://sites.google.com/view/rounabi/gengohakudatsu

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Gallaudet University			